國學院大學学術情報リポジトリ

書評
水無田気流著『「居場所」のない男、「時間」がない女』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本田, 一成 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000992

〈書評〉

水無田気流著
『「居場所」のない男，「時間」がない女』
日本経済新聞出版社，2015 年

本　田　一　成

日本の国民男女の人生の深刻さを描く書である。一緒に暮らしているはずの夫と妻だが，それぞれの生活時間と空間は分離している。そう言われると，ジェンダー構造を主眼に置き，いわば女性学に終始する著作かと思われがちだが，大幅に男性学のスペースをとる点で異色である。本書の目次は次の通りである。

はじめに　サラリーマン家庭の「時空間の歪み」
第 1 部　居場所のない男
　第 1 章　男女の時空間分離がもたらした悲劇
　第 2 章「弱音を吐けない」という男性問題
　第 3 章　日本男性の「関係貧困」
第 2 部　時間のない女
　第 1 章　既婚女性は家族の「時間財」
　第 2 章　日本女性の「時間貧困」
　第 3 章　出産タイムリミットに追われる日本女性
第 3 部　時空の歪みを超えるために
　第 1 章　不寛容な日本の私
　第 2 章　総合的な「生活者」を考える

第 1 部では，かつて強烈な印象を振りまいたテレビ広告のセリフ「亭主元気

で留守がいい。」の意味を改めて問うことを皮切りに，夫婦となったパートナーの生活時間と空間がいかに重ならないかを検証し，相互の理想像や実体に先入観や誤解が入り組むことを示す。また，強いと思われているはずの男性が様々な面で弱く未熟であり，それが現出した場合の男性自身と女性が被る危険性について述べる。さらに，そうは見えないはずの男性の深い孤独さとその形成過程について試論を展開する。

第 2 部は，夫が死んでようやく楽ができる「後家楽」の意味を説く。家族にとって女性は，消耗ぶりが考慮されることはなく，頼りに頼られているいわば資源であることを考証する。女性がいかに時間を奪われているかだけでなく，そうして当然のように，強要されていないかのように愛情や責任を求められる点で過酷な立場に置かれることを示す。同時に夫婦の時間の分担の乖離が空間の乖離に直結する構造を突きつける。しかも，女性に対する幻想や誤解，一層の期待などが問題をさらに拗らせ，夫婦の分離を頑強にしていることを指摘する。さらに，女性に関する社会規範に追いつこうとすればするほど，女性は怒涛の人生を疾走することになる現実を活写する。

第 3 部は，課題の根底にはかつての日本経済の安定性に基づく不寛容さが粘着していることを指摘し，「ワーク・ライフ・アンバランス」な現状を取り上げる。しかも，あたかも，妻がいないと人生のバランスがとれない夫の，「ワイフ・ライフ・バランス（WLB）」（ただし，筆者は表現していない。）とでも呼ぶべき生活ぶりを描き，それが不変である場合の近未来のシナリオを提示して警告する。女性の社会進出と男性の家庭や地域への進出に踏み出すために旧来の意識や制度を少しずつ解体することを促す。

なお，少し見方を変えると，本書には主要な主張から延長線も引かれていることに気づく。第 1 部では，本来いるべき居場所がないといいながら，別のところには居場所がある男性だが，それすらもない場合について補っている。居場所がなくなりつつある男性，いまはもう失った男性，欲しかったけれど手に入らなかった男性，もともとなかった男性，などにも言及する。それらを総称

して，居場所がない男，と表現しているのである。

また，第 2 部は，女性の一生では自由に使える時間が短い，という時間の長短からみて時間がない，という以外のケースも視野に収める。女性のライフコースには遅すぎると困ることが多く，それに間に合わせようと切迫する女性を描いて，時間の早晩という意味で時間がない，という深刻な点も加えるのである。

社会学者の著作を読んでこなかったせいか，評者には本書の分析方法が目新しく驚かされる点が多い。一言でいえば，多面重層的総合化による客観的分析とでもいうべきであろうか。総合化といっても悠々と整合させるのではなく，むしろ汲々としながら，使用に耐えるものを厳選して総動員しているように見受けられる。しかし，その気概が，主張にリアリティを持たせ，読者の感情移入を誘う。この一見科学的ではない状況は，対極を示した方がわかりやすいかもしれない。例えば，「テーマは何であってもよいから，データさえあれば分析できる。」と言いたげな，主張よりも計量分析手法そのものの正当性の探求の方を前面に押し出す分析や，「他のことはいろいろあるけれど，ともかくこれが深刻な問題だ。」とあらかじめ執念を抱え込んだ上での一点突破の恐ろしいほど深く狭い分析などである。これらは，少し考えれば想像できる結論なのにリアリティからは遠くなる。

もう少し，本書の手法に踏み込み，著者の流儀に共感を得られる読者の関心を喚起しておきたい。本書は，問題意識に基づいて自らがデータを生成して検証するわけではなく，既存の資料を利用する。ただし，その利用能力に非常に長けている。著者の触手は長く柔軟で，遠くに伸ばし近くに戻りと，問題関心に従いあらゆる資料を発掘して利用し，つなげていく。調査結果を多用するが，他方で手堅い社会学者の古典や研究書，男女を論じたベストセラー，さらに小説や詩なども解読する。それらに加えて，随所で読者の共感を得るツールを持ち出す。すなわち，自分のこと，自分の感情を書き，参与観察結果のようにして織り交ぜる。

こうした検証によって，平均値や説明力の提示ではなく，そうでいてあれもこれもあるとは言わず，リアリティのある図式の提示を重ねる。一例をあげよう。同じく大学教員でも常勤教員の評者なら，「ようやく子どもが大きくなり，仕事ができるようになった。」と吐き出すところを，著者のように非常勤なら「仕事のペースをまったく落とさなかった。」というわけである。どちらにも多かれ少なかれ何がしかのウソがあるのかもしれない。だが，こういう男女プラス雇用形態の図式は明確で強力な論拠となりうる。同様に，時間比較と空間比較のそれぞれは弱くても，時空比較で骨太にする。

名は体を表すという。読後に改めて「居場所のない男，時間のない女」という本書のタイトルを読めば，簡潔に問題点を語っていることがわかる。

本書の主張点を勘案し文字を足してタイトルを読みかえれば，「本来時間を使うべき居場所がない男，本来の居場所で使うべき時間がない女」となり，取り組むべき問題の中身は双胎であることがわかる。

さらに，書き換えよう。本書と同様に主に夫婦を取り上げると，

「時間を使うべきでない居場所ならば，ある夫」
「居場所とすべきではないところで使う時間ならば，ある妻」

ともいえる。そうならば，ともに徒労に終わっている不幸な人生の夫婦とみなせるから，以下のような問題点は明白である。

職業生活に終始し，絶望していく夫の人生（もちろん，仕事で自己実現，妻を過小評価しつつ仕事へ逃げるなど，折り合いの付け方は様々。）

家庭生活に我慢し，絶望していく妻の人生（もちろん，家庭で自己実現，夫を過小評価しつつ家庭に居続けるなど，折り合いの付け方は様々。）

それに気づかなかったか，気づいていても行動を変えられなかった不幸な夫婦の人生（もちろん，お互いにがまんしてきた，あの人よりはましだ，など折

り合いの付け方は様々。）などとなろう。

極端だが，的外れではないと思う。もしそんなもんだと受け入れたいと思うのなら，そう思うほどに次の③の夫婦に近くなる。

この人生を是とするか否とするか。これは，そのようにたずねないだけで，本質は男女役割分業意識で近似させてもよい。男女役割分業が◯か×か。

①　×男と×女，が理想。
②　×男と◯女，×女と◯男，は前者少なく後者多いが，ひとすじの光明はある。
③　◯男と◯女が，最も危険。

したがって，著者がしてみせてように，③に近いシナリオを書くことで今後の危険を告知することは有効であるけれども，同時に①②のシナリオが必要になる。しかも，それらのシナリオは実現のために今後何をすべきかが描かれていなければならず，困難を極める。

したがって，本書は，すぐれた分析視角による現状把握とそれに基づく刷新の方向は正しくても，実現のための具体的な方策は未知である現状を伝えている。ただし，それは本書の課題というよりも，今後の日本を考えるすべての者の課題であろう。

これはとても難しい営みであり，本書はその難しさも潜在的に証明している。例えば，本書は頻繁に男性には孤立化しやすい性質があり，同性でつながれないことを指摘する。しかし，女性にはそんな性質が弱いとしても，やはり同性でつながれない。年齢や世代，正社員，専業主婦，主婦パートなどの雇用形態，既婚者と未婚者と離婚者の婚姻経験，間に合わせるために切迫する女性とノスタルジーと懺悔に浸りきった女性，など各人にとって正しい言い分に基づく対立構造が多すぎて，つながれないのである。本書が下敷きにしているのは，実はこのメッセージであるのは明白である。

それが正しいとすれば，日本の課題としてどんな社会を構想すべきかとか，国全体をそのように持っていこうとすれば，的を射ていない。そんな誘導はできないほど国民男女は分断されている。信じてきたもの，拠り所としてきたもののすべてを疑い，まったく新しい自分になってやる，との決心を固めた一人ひとりが個別に対処して，自分たちの人生に対立のない領域を増やしていくほかはない。精密な現状の分析と問題点の把握が重ねられるのに比して，解決や刷新のための具体策がほとんど提示されない本当の理由はここにあるのかもしれない。